

COSMOS集



「あすなる集」特選

固い座席

高橋 梨穂子*新 潟

落ちてゆく溶いた玉子を目で追ってもしやきみこそいつかのニュートンの球場のサイレンみたいに叫ばれてわたしは今日もいやなママかなつまらない映画を二時間観る座席おしりがよつつに割れる固さだストッキングにベージュの湿布が透けているペテラン看護師のふくらはぎ目に入るニュースはまるで指先にふれる針 だめ しほんでしまふ

ダブルヘッダー

清 水 佑太郎*東京

履歴書の経歴欄の行足りず回り道した年数が空く
一般の三十五歳は履歴書に経歴全部書けるのかしら
一・八点だけ不足の不合格 本郷の空はいつも青くて
高校は午前で中学午後からの卒業式のダブルヘッダー
スタツフとしての卒業式だから 涙は出ない汗は流れる

炎のこころ

中 村 恵*鳥 取

七歳が黒のクレヨン使い切る光景ありき女川町に

正常です

新屋 希子 熊本

非接触の体温計を鼻や頬にかざせば楽し皮温のちがひ
顔認証検温センサー設置され閑所となれる社員玄関
朝毎に申告されし体温のデータがさらす性周期をも
次々に会議メンバー入れ替はり「温めとつた」と席ゆづられぬ
センサーに「正常です」と言はれたり「それでもないよ」と小声で返す

怒りの声

高橋 みどり*愛知

答辞読む生徒の声も手の中の白奉書紙もかすかに震う
「プラゴミを減らせ」と授業で言う我が毎晩捨てるコンタクトレンズ
ともしびを消し地下壕にひと潜む 二十一世紀のウクライナ
コロナだけが戦う相手のはずだった二十二年の流血
春まだきキエフに「祈り」のハッシュタグ付けたひまわり画像が届く

水の花

内藤 丈子 福井

若狭なる五つの湖^{うみ}をめぐりきて水鳥のごと足湯に入る
うぐひすの凍れる涙融くる春の窓のひかりに母はまどろむ
春浅き東尋坊であつあつの焼き牡蠣を食む潮鳴りのなか
くわうくわうと氷の花を咲かせぬる雪女棲む夜叉ヶ池の森
河豚漁の若狭の海に音もなくプルサーマルの輸送船来る

おでんの幟 山下啓 子*香川

エプロンの裾をたくして摘みゆけり緑き菜花がこぼるるまでに
「あれ」「それ」と口籠りつつ話す夫アレがどしたんソレがどしたん
コンビニのおでんの幟パタパタと寒きいち日呼込みをする
密避けるつもりで一回やり過ごすエレベーターの次は満員
微笑みを浮かべたままの雛の顔お疲れ様と埃を払う

ロックダウン 初音左近 鹿児島

コロナ禍に子の声消えしタラワでは町を歩くは犬と浮浪者
ロックダウンもう三週間店頭に米も野菜も消えて久しい

高床のキアキアハウスに大勢で寝れば全員コロナ陽性
「コロナにはうがい手洗いの必要」と言へど水道無き家もあり
高齢者数人逝きてキリバスのロックダウンはもう一か月

ふきのたう 杜河内 久美子 三重

露の臺もう出た頃かと問ふ母は痺れ増したる足を撫である
ほろ苦きかをりを放つふきのたう手のひらにのせ母に見せたり
引退を一年延ばすと夫が決め家中の物また活気づく
もう一年勤め続くといふ夫の新たな春にわれも入りゆく
保育園の休みを喜ぶをさならは(濃厚接触者)の意味さへ知らず

寄付少し 大越 美佐子 東京

買ひ来たる弁当の角きんかんの甘煮やはやは程好く甘し
町中に出来た新店舗、閉じた店二人居の日々の大きな話題
コートの手握るがへしつつ自転車に乗る人ありて今日は春めく

マスクごし沈丁花の香感じつつ自転車で行く遠くのスーパー
ウクライナの戦車と雪と逃げる人見れば哀しく寄付少しする

ママさん床屋 小河 富美子*千葉

雛祭りの歌が外からきこえくるママさん床屋で髪を切る孫
加湿器に湯気を立たせて雨曇り春の作付ノートに書き出す
貝殻虫執念くけずり剪定し共に越してきた椿伸びやか
大昔ここは沼地であつたとか海抜五〇平らな畑地
植え替えをしつつ八年胡蝶蘭夫亡く十年茎伸ばしおり

さくらざわ医院 加藤 かつゑ*新潟

布雛の白き頬より見えはじめ二月の朝はようやく明ける
捜しもの書類一通 ソファの上のコアラはたぶん知っているはず
やわらかく落葉打つ音近づきて雨とおり過ぐ国上山早春
さくらざわ医院で呼ばれる「つばきざわさん」待合室に春の風入る
お向いに新しき隣人野上さん今宵より家はいのち持ちたり

前向き 岸下澄 江*鳥取

後悔のしない生きかた念いつつ五本の指の靴下を履く
きのうから夫の言葉に(いじけ虫)ぴったりつきて素直になれず
人おらぬ畑でさんさん愚痴を吐き昼の用意に急いで帰る
二十年箱に眠りしお雛さまうす紙とれば細目まばたく
「退院の前に新車を買いました」友のメールの前向きが好き

アリゾナの友 大宅朋子 佐賀

村中に電話一台の昭和期は遙かとなりぬスマホを見つつ

むらさきのスターチスに添ふ霞草夫きりぎりすを立てる妻にも似たり
雑草ざくそうに支へられ咲く白ダリア供華にと剪りぬ五分咲き選りて

野にあれば時ながく咲くこの桔梗花瓶に挿せば二日で萎む
アリゾナの友との電話はコロナ禍で身の不調とぞいづくも同じ

影ひとつなる 斎藤 嶺也 北海道

「戦争は悪だ」と宮柵二うたひしが凍土を駆くるロシアの戦車
人殺しを兵士の親は教へまゐりて死ねよと言ふはずもなく
せまり来る危機に目つむりうたよまむでむしなるかよはきものわれ
見わたせば真白き雪ぞ如月のつよきひかりに影青く見ゆ
院内に車いす押す老夫が杖もちてをり影ひとつなる

春の香 池内 祥子*愛媛

初蝶は畦の草よりふんわりと現れふんわり春田に消える
桃の木は木肌光らせ枝えだを赤色にして花咲く準備
壺焼きの腸の螺旋を取り出せば瀬戸内海の春の香満ちる
釣り上げた真鯛の顔のアイシャドー濃いほど美味と釣人は言う
菜の花と分葱があれば食卓は春色となりシャンパンを抜く

バックル 前中 映 東京

ふたご座が星のかげらを吐くといふ夜を冷えびえと帰りゆくなり
西友の肉をボン酢で食ひながらゆふべ見てゐる「格付けチェック」
入院の理由は訊かずひとコマの代講を請け負ふ入試前
振り抜けば凶器にもなるバックルにけもの革をふかぶかとさす
死ぬことを忘れたときに人は死ぬ籠かごえた身体からだを風に吹かれて
休日がいちにもない一月を終へて小さな湯船にしづむ

牽牛子塚 友田 昌子*奈良

八角は天皇陵よ牽牛けんぎょ子塚八角の美よ斉明女帝か
白鷺は斉明女帝のたましいか牽牛子塚の上を飛びくる
白菜をつかみ根もとに刃を入れるパリツと弾け菜の香りたつ
井戸水の蛇口の栓に布を巻く寒波の予報ふたたび聞きて
手になじむほの温かき井戸の水糸洗えば心ほぐれる

諏訪の風呂 藤田 邦彦*東京

この風呂に諏訪の神々もつかつたか不敬なことを思う新年
立木さえ凍てて割れるという諏訪のま冬の道に白き湯気たつ
赤彦も茹っていたか諏訪の風呂四十五度がめずらしくなし
湯船でて首から下は真っ赤っか諏訪の男は熱い湯が好き
うめるなどもつてのほかよ諏訪の風呂かけ湯ばかりで敗退したり

早春賦 樺 か乃 広島

早春賦口ずさみつつ米を研ぐ亡母のしぐさを泳がせながら
人生の足早に過ぎてゆくことなど膝を抱へて姉と二人で
振り返り振り返りつつ人生は終はるものらし樺に手を振る
ナンキンハゼみゆる茶房に肘つきて身勝手なことを巡らせてゐる
逃げ道はいくつもありてこの夜更けアイネクライネナハトムジーク

赤玉ポートワイン 川 添良 子*神奈川

密やかに嗜みし赤玉ポートワイン妣とわれとの洋酒甘酒
ウクライナの戦火はやまず無力なるわが佇つ庭の紅梅鮮やく
青白びんぱくき雛ひなの面にしあわせな末路は見えずプーチンの春

四十雀二羽きてゆらす海棠の影の明るさ弥生のいぶき

怒りやすくなりたるわれかひとり怒りひとり淋しむのちも怒りて

将来の爺さん

丸山 克介 鹿兒島

スーパ―に「ひな祭り」の歌聴きながら夕餉のための豚カツを買ふ

岩つつじ・山菜さんさい・水仙・木瓜咲きてアートめきたる今朝の吾が庭

海風のすり抜けてくる喫煙所夕べ三人煙吐きをり

将来の爺さん二人居眠りす（優先席）に高校生が

傘立てに吾が愛用の傘の無し春雨に濡れ銭湯を出づ

だんまりだんまり

野口 喜美江*群馬

独り居のわれの自由を引きしめて生きて行かねば たんぽぽ咲けり



「その二集」特選

海老茶袴

尾花照子*福岡

風花の疫病えびやの世界見上げおり餌を待ちたる金魚のように

木の闇をほぐすメジロのさえずりと見れば山茶さんさいの香の雨はふる

浅春のキエフの空をロシア軍へりは行きたりピラニアのごと

筒をもつ海老茶袴へ風吹きて花かんざしは春の陽かえす

矢部川の岸辺をみれば春の陽は地にしみて大根の花

亡き夫をしのぶ佗助今年また一つ二つと蓄ふくらむ

誰も来ぬだんまりだんまりひと日過ぎ赤城風が枯れ葉をとばす

一葉の五千円札にしのびたり信如・美登利の初々しさを

いつ開く重たき扉ひさかたの天の岩戸の逸話恋しき

檸檬ひんやり

末光 奈緒子*神奈川

二階から目薬を注す訳でなくきちんと注せど痒み止まらず

病院へ付き添いし道ふくふくと柳ふくらみ母だけいな

スクランブルエッグに混ぜる菜の花の苦味じんわり脳へ達す

軽く握る檸檬ひんやり肺病の微熱を移す梶井基次郎

丸善の画本の上に一作家は爆弾として檸檬残せり
酸味勝るフルーツなれど色かたち香り優りて檸檬愛らし

戦況を見る

秋山幸子千葉

ポータブル電源とどくずつしりと重きは有事の安心となれ

オフグリッド プチから始める脱炭素ソーラーパワーを享受してをり

いま何処と目の前の父に問ひかけるバリやロンドンをひとり旅する

守られしスマホの画面で戦況を見る悲しさと後ろめたさと

花屋にて供花えらびる昼さがり母の好みし一輪を添ふ

おしりが痛い 高田 圭*静岡

加湿器が冷たい霧と高音のノイズを共に吹き上げている
地理的な不利が少しはなくなつてZoomの中の一人の私
製品の一つ一つを検査する私にはないリモートワーク
サドルから地表の音が聞こえて受けとめきれぬおしりが痛い
車ではあんなに近い職場までこいだペダルのほどよい重さ

かほちや 大池 アザミ*兵庫

美容師と鏡の中で会話する自分がとてもがんばっている
一日の大半眠る柴犬は残り時間を憂うことなく
帰宅する足取り軽いわたくしはひとりになれば饒舌である
連絡のつかない友人増えてきた遠心力の仕業と思う
眠りたい眠りたいけど脳内をかほちや、かほちやが飛びかっている

母 牛 新 敦子 鳥取

をさな子の指三本の太さなりき乳搾りする父の親指
早朝の寒き牛舎に父が搾る新なる白き乳に湯気たつ
父の手が足首掴み引つ張ればぬめる仔牛でんこがつるりと出でぬ
横たはる初産の牛ねぎらひて飲ませり泡のあふるるビール
一昼夜かけて産みたる母牛の睫毛にひかる涙ひとつぶ
父母の代で役目を終へしミルカーに活ける水仙供花のごとしも

性 善 説 池田 あつ子 愛知

飛びたてる白鳥北へ帰るならロシアに伝へようクライナの惨を
春遠く戦火無慈悲に燃えさかり命と暮しの絶たれゆく国

ふるへつつ死にたくない少女つぶやくキエフ地下鉄駅の構内
東からかつての仲間が攻めてくる性善説を踏みつぶしつつ
プーチンの無表情なる目が恐い殺戮に馴れてしまつたその目
折にふれ伯父の無念の戦死思ふ降伏後なされし千鳥侵攻

土曜の深夜 成田 裕 子*青森

連翹の今は蕾も見えぬ枝に冬の名残のぼた雪絡む
春風と土のにおいとあたたかい日差し私もゆず茶に溶ける
生姜香る野菜スープに溶け込んだ君の優しさ熱のある日に
多すぎぬように言葉を絞つつ君にLINEす土曜の深夜
「やつとだね」久しぶりだね」お茶会で少しやつれた顔たちと会う

蜂 洞 の 山 前田 泰隆 長崎

若き頃視野に入らざりし野辺の花鳥に赴任し美しさ知る
急峻な山と海とがリフレイン対馬の山は蜂洞の山
白嶽の伏流水は大海へ竿振るさきにげんかいつつじ
大対馬プロペラ機にてランディング迎へてくるハクウンキスゲ
川でなく林の中を舞ふ光対馬固有種アキマドボタル

春を待つ 長谷川 綾 子*新潟

店先の桃の花束目に入りついで飾らぬ雛ひなを思う
オレンジの街灯の下で雪が散る冬を惜しんで踊るがごとく
雪とけて道に大きな水たまり光れる街が逆さに映る
新色のルージュを買つて春を待つ吹雪の寒さすっかり忘れて
足痛めケンケン歩きする犬はリードくわえて散歩をねだる

多 産 系 植 田 カズミ 鹿見島

ピーラーでシャツシャツと剥けばまつ白な赤土生まれの新ジャガとなる
大小のジャガ芋コロコロ出るを見て「多産系ね」と言へば笑へり
カタカタと芋掘り機行けば従いて行くイソヒヨドリはお供のごとく
圧力鍋蒸気を噴けり「シユシユポッポ」機関車トーマスのお呼びでござる
木枯らしに身を細らせし枯れススキ束ねて箒に作らむとせり

除雪車やすむ 小 森 鈴 子 岐 阜

物干しの竿をにぎりてぶら下がる義母よいまにも竿が折れさう
反戦の思ひあらはず紙持ちて吾も立ちたり歩道のわきに
タンポポのごとき黄の色ひからせて除雪車やすむ近江の春は
入院の母はベッドに上向きて手にて踊れり高砂の舞を
若き日は笑ひとばせし失敗を娘におしへられ落ち込みてゐる

ベットクリニツク 丸 山 淳 子 * 東 京

新生児のまあるい胸が息してるこれからだねえ君の人生
角つこの丸く刈られた藪椿空に向く花ひとつ残して



雑草といわれてあえなく抜かれたる小さきつぼみ数多つけるに
お互いの犬猫ほめあい順を待つ昼の陽さし入るベットクリニツク
月のよき夜にはメールを送りくる娘を亡くした古き友人

東ヨーロッパの空 吉 弘 藤 枝 琦 玉

パラリンピックに背中押されてあしなへの我も再び卓球始む
古里の方言ときを交へつつ妹の電話は日溜りのやう
チーズを食べよ人と話せと妹が認知症予防を我にすすめる
たまらなく人声恋しき夕まぐれ雨はひそかに竹の葉に降る
空爆を報ずる画面の背景の東ヨーロッパの空こよなく青し

都営青山団地 富 永 弘 東 京

善光寺墓地に声あげ子供らの遊ぶをしばし見て居りわれは
この寺の脇の私道を泣き止まぬ子を負ひ歩みき寝苦しき夜を
二段ベッドに小五と小三の娘たち寝てゐき都営青山団地
歯科医院待合室の熱帯魚身をひるがへすたびにかがやく
寒き日の銀杏通りを乳母車われを追ひ越し離れゆくなり

ハンモック 戸 田 セツコ * 広 島

ほんの昨日きのう生まれたような気もするが明日わたしは九十になる
山菜莢の花の春めく朝なれど卒寿迎えて何がなさびし
ハンモックに寝かされ母に揺すられしかすかな記憶も昨日のごとし
溪流の音きこえる道のえき山菜莢の黄に春を知りたり
在りたいな百歳までも現役で卒寿の明けの星にいのりを